

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2023夏 No.118



春はバッハで演奏会♪♪

財団の茶室・晴松亭の立礼席は、クラシックの演奏会との相性が良く、これまでも、たくさんのコンサートにご利用いただきました。今回、演奏されたアンサンブル・フィノさんは2度目の演奏会。6人のメンバーが、愉快的語りとステキな演奏で楽しませてくれました。茶の湯とクラシックの異色のコラボはこれからも頑張ります。乞うご期待。

- 茶室 de 若人茶会の始まり
- 花の魅力・花の力
- 1つだけ美術館の茶会
- 6月から8月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団
〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号
TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212
2023年夏号 No.118 6月1日発行(季刊)

茶室 de 若人茶会の始まり

令和5年度より本格的に始まる「若人茶会」の先駆けとして、三月十九日に大手前高松中学・高等学校の茶道部が、財団でお茶会をされ、その体験記をいただきました。財団では、今年度より県内外の高校茶道部等を中心に茶室を無料開放して、お稽古やお茶会の場として利用していただく事にいたしました。きちんとした茶室で、実際にお茶会を体験する事は、とても大切な経験や思い出になると思います。多くの茶道部の皆さんにご利用いただきたいと思います。

お茶会がくれた贈りもの

大手前高松中学・高等学校 茶道部

部長 山田果林（高校3年）

大手前高松中学高等学校・茶道部は、先生を招いてお稽古に励み、年に数回、季節にちなんだお茶会に参加しながら、その成果を今日までつなげて参りました。

ようやく新型コロナウイルス感染症も鎮まり、念願のお茶会を再開することができました。しかしこれまで余儀なく繰り返された行事の中断は、連綿と紡いできた伝統や、部員同士の結束に影を落としていました。なにより多くの部員にとって、本茶会は初舞台となっていた、皆さまに無作法なものになってしまったものと存じます。私自身、他校交えたお茶席は、部長就任以来、初めてだったのです。気さくで和やかなお茶席を企図したにもかかわらず、慣れないお茶席は、肩に力が入ってしまい、張り詰めた空気を作り上げてしまいました。平静を装

い、身体力を抜くよう、自分に言い聞かせても逆効果でした。しかし腹を据えてお茶室に座り、ぼんやり庭の景色やお茶室全体を眺めていると、不思議と気持ちが落ち着き、その空間にあった心地よさを期せずして感得したことを未だに覚えています。

美藻庵・晴松亭での催しは、私たちにあまりに過分なものでしたが、またとない貴重な機縁となりました。そこは絢爛な近代建築と相まみえる、臍長けた気品に溢れていて、私たちの狭量なところを慰めてくれる空間でした。身を低くして入る躰口は「茅の輪」を彷彿とさせ、小間のお茶室はどこか俗界と異なる清らかな神秘に溢れていました。続く和室や立礼席は、まさに清浄の世界で、こうした異空間へさらわれてしまった驚きを未だ隠すことはできません。庭園の縁側に身を置けば、そこは街の喧騒からぽっかり隔絶する別天地でした。小さく流れる水の音や、木々のざわめき、鳥のさえずりなど、あまりに漠然と、そして明々と

した自然の移ろいに感じ入らずにおれません。青々とした葉をつける樹木の下にふと目を配れば、湿った苔やシダ類がびっしり地を這い、新緑と相反する深い静寂世界と幽玄な侘びがそつとあらわれていました。こうした万葉の美が心を穏やかにしてくれていたのだという発見を未だ忘れることはできません。

このとりとめのない背景のもと、お茶席は『伊勢物語』の「八十二段・渚の院」をテーマに進行いたしました。かの有名な業平の和歌「世の中に絶えて桜のなかりせば はるのころはのどけからまし」を通じて、春の美しい情景や、春や桜に込められた寓意、皇子のこころの内奥に届く深い哀愁を表現すべく、茶席の話題の背景に置いて、ささやかながらの茶席を設けてみました。お床には大徳寺塔頭三玄院 長谷川寛州和尚による「弄花香滿衣」というお軸をかけたせていただき、春の香りを感じられるよう一意専心に挑みました。お菓子は先生方のご指導のもと、手作りの和三盆糖に初挑戦しました。そこには塩漬けの桜花の風味が隠されており、和三盆糖の優しい甘さと春の香りが口の中いっぱいに広がります。大手前高松の校章である「桜の型」を用いて型取りするなど、作る愉しさに加え、味わう愉しさ、四季折々の風情を感じる愉しさ、そして何より客にもてなす愉しさなど、和菓子の意義をこの日たくさん見いだすことができました。



「渚の院」は、七夕についても触れていることをご存知と思います。惟喬親王と紀有常、右馬頭（業平）が、交野の「天の河原」に鷹狩に寄ったとき、「狩り暮らし たなばたつめに 宿からむ 天の河原に 我は来にけり」という和歌を残しています。この歌の「たなばたつめ」（棚機津女）こそが「織姫」のことで、年

に一度、この地方に訪れる惟喬親王を彦星として歌われています。

そこに因んで香合は紀太理光さんの富田焼で、星の形をした「彦星」を用いて、蓋置は「金留」としました。桜の背景に星が見える情景を彷彿とさせるよう、工夫を凝らしてみました。

また生け花や、お土産としての桜の折り紙、桜の水引や、桜のくず玉など、部員一丸となって準備を行いました。あろうことか先輩方も応援に駆けつけていただき、そうした御助力がなければ、まるで物足りないお茶席になっていたに違いないと思います。こうした皆様のご尽力のもと、当日は天気にも恵まれ、陽春のな

か、穏やかにお茶会を催すことができました。部員は早朝から集まり、久しぶりに総勢が歩調をそろえて行動することができたことをうれしく思います。当日は完全予約制として、一日五回の茶席を設けました。私たちの拙いお喋りと、もどかしい作法をお客様は温かく(甘く)お迎えいただいたお蔭で、次第に緊張もほぐれ、和やかな雰囲気演出することができたように思います。しかしそうしただけでも、お茶を点てる作法まで手を抜くわけにはいきません。手順を踏みながら、丁寧に行わねばならず、とても集中力が必要であることを実感しました。柔と剛を使い分けて、一日を過ごすこと



は、私たちの及ぶところではなかったのです。茶席に散見される数々の失敗に、和やかな笑顔で応じることはなかなかできるものではありません。これは経験豊かな先達の所作をみれば一目瞭然で、むしろお客さまの方が、そうした対応に長けていて、主客転倒がたびたび起きていたのです。しかも茶席の主として、成功させようと腐心するほど、ひどくなる一方でした。もてなそうと焦る気持ちだが、むしろ一方通行な客さばきの対応に転じてしまい、基本的なコミュニケーションができなくなっていたのです。主客転倒を甘んじ、それに応じる柔軟さこそ、茶席の主が備えていなければならなかったもので、もてなしつつ、もてなされ、教えたつもりが教えられ、そうした対応の中庸を保ちながら、互いの知見やこころの接点を共有することが大切だったのです。これは対面による交流で、はじめて得た知見でした。今日まで続いていた三密回避を省みると、私たち以上に、世界がどれほど大切な機縁を失ったことでしょいか。ニュースをみれば、「分断」という文脈で世界を席巻しようと息ま

力が肯定的に働いており、人が人を疑い恨む、そうした悪癖が蔓延していることにも気付きました。そうした時代こそ、茶席で一服の清涼を得ながらお互いをみつめ、敬天愛人の精神で、こころの笑顔を取り戻さなければならぬのかもしれない。

最後に部員から以下のような感想があ

りましたので、そのまま転記いたしました。

◆ 「今までのお茶会の中で一番本格的にできてとても良い経験になったし、また開催したいと思うほど楽しかったです。具体的には、お茶会で出すお菓子を自分で作るなど、普段のお茶会では経験できないようなことまでできて、ワクワクしました。」

◆ 「今回の中條財団でのお茶会はコロナ化の影響で初めてのお茶会でした。小間のお茶席は普段の練習のお点前とは違いとても新鮮で楽しかったです。一からお茶会を開くことで部員同士の仲も深まり貴重な経験をさせていただきました。」

◆ 殆どの部員が、今回の茶席で和やかなひとときを体感し、本番のお茶席で緊張する一方、とても充実感を得ることができたようです。

◆ 本茶会はいつも勉強で忙しく過ごしながら私たち学生にとって、日本文化の原点に触れる貴重なひとときとなりました。心身の安定や礼儀作法の向上、文化的・芸術的な知性や感性の向上やコミュニケーションの促進といった効果は、学内でなかなか得ることはできないものでした。こうした深淵な茶道の経験を通じて、日本文化を改めて感じ入りながら、さらなる知見を深めて参りたいと思います。

花の魅力・花の力

四月の五人様茶会で、初めてお花の席をしてくださった竹井先生はフラワーデザイナー。一度は一般の企業に就職されたのに、花に魅せられて一から花の勉強を始められたそうです。お茶の家に生まれて培われた花への想いに導かれてプロの世界に。今回は楽しく花の魅力を伝えて下さいました。

フラワーデザイナー

竹井陽二郎

何気なく暮らしている家の中には、生まれてから常に花がありました。私の母と祖母は華道と茶道の先生です。

祖母がよく教えてくれたのですが、当時の私は内容はそっちのけで、お茶の和菓子目当てで興味を持っていませんでした。華道教室を覗いたりするものの、花の存在を気にするわけでもなく、ただの日常として何気なく暮らしています。

今思えば、玄関先で花に迎えられ、床間に小さな花があり、食卓には花器を生かした一輪挿しがあり。たくさんの方に囲まれていた記憶があります。ですが、花の魅力に気づくのはその後20年も経ってから。

大学を卒業して花とは関係のない企業に就職しました。

休日、旅行先のホテルでロビーにあった高さ3m近い生け込みを見て花に興味をもちます。ホテルの吹き抜け部分に

あった大きな壺の生け込みは、雲龍柳をふんだんに使用したものでした。雲龍柳の周りには、沢山の赤いグロリオサが顔を出しています。生き生きとした生け込みは、まるで一つの生物かと思ふうほど。遥か高い吹き抜けの天井まで登っていくような感覚に陥りました。

ひとつひとつ枝の動きが自然で、伸び伸びとした雲龍柳。その周りに等間隔に生けられたグロリオサは、どこか人工的で、人の技術と自然の調和を感じました。

ここで感じた技術と自然の調和は現在でも花を生ける時に心がけていることのひとつです。

この大きな生け込みは、花の名前も知らない私が花業界に飛び込むきっかけになりました。当時の私を振り返れば行動力があったものの花の名前も知らず、興味もほとんどありません。アルバイトから花屋に勤めたのですが自分が思い描く事をするには、実力不足であることに気が付きます。

新しく始めることは苦しくも楽しく、興味を持つ事に時間はかかりませんでした。やがて次々と知識と技術を養うことに楽しみを覚え、目標に近づくことができました。今の時代、動画やSNSで情報が溢れていることも成長する助けになったと感じています。

ここでもうやく、実家の華道に触れる事になります。仕事では西洋的なアレンジが多く、華道で学ぶことは沢山ありました。自身が恵まれた環境だった事に初めて気がつきました。

仕事をする中でよく感じたことがありました。花を見て感じる事は人それぞれで、美しさの基準も異なります。ある人が綺麗だと思ったものは、ある人にとっては心に響かないものであったりするものです。

お祝いや弔いなど人の気持ちを伝えるために花はよく使われます。人の好みや感覚は異なるからこそおもしろく、それを表現する立場であるからこそ、この仕事にやりがいを見出すことができました。

植物や花に触れるほど代え難い魅力を持つものだと感じます。

形や色が様々で、香りを持つものなどたくさん種類がありますが、いまだに全て把握できていないと思います。同じ品種でも咲き方が異なれば季節により大きさも異なります。同じ花でも環境により枯れやすくなり、枯れていく花だからこそ儂い魅力を持ち、生命の力強さを感じ



じます。同じ花を使ってもそれぞれの持つ良さが違い、魅せ方も異なっているのです。

私たちが作るアレンジや装花は、ゼロから自分の力だけで作り上げるものではありません。花の持つ力を借りて、魅力を殺さず生かす事を心掛けて花を生けています。空間を装飾するために花を使用したり、贈り物として感謝を伝えていきます。

私は芸術家ではありませんし、贈る方のお気持ちを表現し、主役の花を生かすサポート役です。見る人の心を動かせることができれば尚嬉しく思います。過去に海外の方が多く滞在するホテル

の生け込みを担当する事になった時、感覚の違いに驚くことができました。

その日は、彩度が高い赤や紫の花を使用した生け込みをつくりました。海外のスタッフの方からは、情熱的で生き生きしていますねと感想を頂き、日本人スタッフの方からは、ちょっと騒がしい感じがするとう指摘を頂きました。また、ある人は赤い花を赤と呼び、ある人は赤い花をアレンジと呼んでいました。

異なる反応を聞いた時に実力不足を感じると同時に、人の感覚の違いに驚いたことを覚えています。それから、より多くの人を心を動かす為にはどうしたら良いか考えるようになりました。

それから5年ほど経ちますが現在も明確な答えは見つかっていませんし、これからずっと追求することだと思っています。

私が初めて花に興味をもつきっかけになった大きな生け込みのように。人生を変える程の魅力を伝えたいと思っています。

今回の五人様茶会では限られた時間の中で、花の魅力と、花の見せ方はひとつではない事を伝えたいと思いました。基本的な花の挿し方や葉の使い方や見せ方などお伝えできたかと思っています。

もっと深掘りして、花の事をお伝えしたいとも考えましたが、自由に楽しむこ

とが大事だと思い、今回は『誰でも挑戦できるフラワーアレンジ』を目標としてお伝えしました。皆様、自由にお花を生けてとても綺麗なアレンジを作られました。

今回は薄茶担当の母とコラボレーションする機会でもあり、私も楽しみながら会を終えることができました。薄茶の席、点心の席、花の席、それぞれに花が生けられていました。

少ない花でも存在感のあるものや、和と洋が入り混じった花など、全て違う生け方ですが、共通していることは空間を彩ることと見る人の心を動かすこと。それぞれの花で足を止めてくださる方が沢山おられました。その時に見た感情も人により異なる物であったと思います。それが花の良さであり追求すべき事だと思っています。

時に花は主役になりますが、食べ物や衣類のように生活必需品ではありません。ですが、あの席に花がなかったことを考えると物足りなさを感じます。気持ちを表現するだけで無く、生活に彩りを添える事も花の魅力のひとつです。

花を使って、贈る方のお気持ちを表現する事と贈られる方のお気持ちを動かす事。技術と自然の調和で、花の個性を殺さずに自然に魅せること。

今回の五人様茶会で少しでも伝えることができ嬉しく思います。花の魅力をより多くの人に知ってもらう機会を頂きありがとうございます。





1つだけ美術館の茶会

ことでん八栗駅の近くにある TAKAMATSU・JAM 4.5の2階にある「1つだけ美術館」という四畳半の小さな美術館で、小さなお茶会をさせていただきました。普段は、ひとつだけの作品について見せ方を工夫して展示する空間です。アートな空間なので茶会と言うより、茶会をインスタレーションとして表現する場として工夫しました。

窓の外を時々、赤い電車がのどかに走り抜けていきます。

かねてよりお茶会の場合は、一つの表現の場として捉えているので、演劇や舞踊といったパフォーマンスと同じように感じていました。パフォーマンスは舞台上で勝手に演じるわけではなく、そこに来てくださった観客と一つの空間を共有して成り立ちます。

お茶会の亭主とお客様の関係によく似ています。同じ設え、同じ道具であつてもお客様が変わると、全く違うお茶席になります。お客様の興味に従って話の内容や展開が大きく変わります。

大寄せの茶席などでは、客の数が多くて、形式や約束事に囚われ過ぎると、席毎の変化が少ないお茶席になりがちですが、少人数の茶席だとお客様の個性が強く出てきますから、各席とも全く違う展開の茶席になります。

今回は、お客様を三人に限定して一日五席で五日間開催したので、全部で二十三席。六〇人余りの方とお茶席となりました。少人数とはいえ、一席の労力は変わりませんので、思いのほか大変な茶席になりました。

それでも、一つ一つのお茶席は宝物のような体験にもなりました。

お茶席をどうするか考えている時に新たな道具が到来しました。基本的に讃岐の作家さんが作った新旧の道具を集めてと漠然と考えていたのですが、狭い空間にちょうど収まる茶机と椅子が来たり、

カンカン石の茶臼や庵治石の茶臼を貸してくださる人が現れたりといろんなすばらしい偶然が重なりました。

お抹茶というのは、ご存知のように碾茶という細かい茶葉を石臼で挽いて微細な粉末にしたものです。粉に挽くとその瞬間から劣化していきますので、通常はお茶会の度に必要なだけを注文します。また、石臼は、大きくて重たいものが多いのですが、今回到来した石臼は、どちらも比較的小型で扱いやすい物でした。庵治石の職人さんが茶臼の目立てを研究して完成した物です。

一人分の薄茶を石臼で引くのに、約十分ほどかかります。茶の湯のことについて、道具のことについて、色々お話ししながら、皆さんでお茶を挽いて、最後にお好きなお茶碗を選んでもらって、挽きたてのお茶を点てさせていただくことを丁寧に繰り返すだけなのですが、ほとんどの皆さんが初めての体験をとっても楽しんでくださったように感じました。

また、次回もあるかも知れませんがよかったらぜひご参加ください。楽しいお茶会を一緒に作りましょう。



ちょっと汗がにじむ季節になど

かき氷やアイスもいいですが、涼を求めて「スイーティーなところてん」はいかがでしょう。

ところてんといえば坂出市にある「清水屋」さんですが、お店の創業は明和元年(1764年)。その昔、悪魚の毒にあてられた日本武尊と八十八名の兵士が湧水によって蘇生したという「八十八の清水」の伝説が残るこの地でいただくところてんは風情があって冷たくて最高です。

四国八十八ヶ所の79札所が近くにあるためお遍路さんにもよく立ち寄られるそうです。そんなお遍路さんから他地方にある食べ方を教えてもらい、いろいろと試行錯誤しオーソドックスな酢醤油から黒糖蜜をかけた浪花風、ごまだれ、四角に切ったくずもち風など種類も豊富にあります。

ところてんは海藻の天草を煮溶かして作られていて、歴史は古く仏教伝来の頃中国から伝わりましたが、江戸時代になると夏の暑い日にところてん売りが盛んになりました。

ツルツと喉越しよく見た目も涼しげなことから“夏の涼味”として定着したようです。天草に含まれる海のミネラルや食物繊維はダイエットや健康志向にマッチしています。

そんなところてんを庵風のお店で木立の涼し気な雰囲気の中、味わってみてはいかがでしょうか。



お茶の風景(20)

ほととぎす

鎌倉時代の曹洞宗・道元禅師の和歌「春は花、夏ほととぎす秋は月、冬雪さえて冷しかりけり」を、川端康成がノーベル賞受賞記念講演「美しい日本の私」に引用して、日本の四季の美しさを改めて世界に披露しました。

渡り鳥のほととぎす(杜鵑、不如帰、時鳥、子規)は五月頃に飛来して古今、新古今などの和歌集に多く詠まれて初夏の風物詩となり、王朝貴族たちの恋を優雅に彩ったようです。

保元の乱に敗れて讃岐配流となった崇徳上皇は「啼けば聞く、聞けば都の恋しきにこの里過ぎよ山ほととぎす」と嘆かれたとか。おまえの鳴き声は都での日々を哀しく思い出させる…。

里では、上皇を慮って鳴くことをやめた鳥たちが、葉っぱの手紙(玉章)を季節のご挨拶にしたという「落とし文伝説」が語り継がれ、お茶の世界でも、この時季、巻いた若葉を形どった菓子を一碗の茶に添えて、悲運の上皇をお慰めする讃岐ならではの茶会が催されます。

財団行事予定
(6月~8月)

休館日水曜日

6月

- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
6月2日(金)・16日(金) 午前10時~12時
- ◆ 和菓子講座 毎月第2金曜日
高橋初乃先生
6月9日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
6月10日(土)・24日(土) 午後1時~
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
6月20日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。(ランチは要予約)

7月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
7月4日(火) 午前11時~午後3時

- ◆ 書道教室 森本義人先生
7月7日(金)・21日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
7月8日(土)・22日(土) 午後1時~
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
7月14日(金) 午前10時~12時
- ◆ 7月懸釜 五人様茶会
武者小路千家 家元教授 高島先生からのメッセージを添えてご案内いたします。
「旧暦七夕は8月末ですが、七夕祭りの趣向でひと時初秋の涼をお楽しみください」
日時 7月16日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
席主 武者小路千家 家元教授 高島守徹
会費 15,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席6名・2時間15分を予定)
第1席 9時 第2席 10時30分
第3席 11時15分 第4席 12時45分
第5席 14時15分 (各席A席・B席)
申込 電話受付 6月19日(月) 10時~

◆ 月に一度の喫茶室

7月18日(火) 午前10時~午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ。(ランチは要予約)

8月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
8月4日(金)・18日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
8月5日(土)・26日(土) 午後1時~
- ◆ あ・うんの数寄講座
「茶の湯をさらに楽しむ夏期講習」
8月6日(日)・19日(土)・20日(日)・
26日(土)・27日(日)
講師等詳細は、最終ページに記載
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
8月11日(金) 午前10時~12時
- ◆ 夏季休館 8月12日(土)~15日(火)
- ◆ 月に一度の喫茶室
8月はお休みさせていただきます。

お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

令和
5年度第30回助成金
交付団体決定

今年度の助成金交付団体に、
次の3件が決定いたしました。

助成金交付団体

- ① かがわ能楽普及の会 代表 横山 馨子
- ② 認定NPO法人農村歌舞伎
祇園座保存会 代表 鎌田 義美
- ③ 流転 RUTeN 代表 吉田 亜希

令和5年度 財団賞推薦募集

詳細は、財団ホームページをご覧ください。
事務局までお問い合わせ下さい。
提出締切 | 令和5年6月30日

● 財団からのお知らせ

第9回 あ・うんの数寄講座

「茶の湯をさらに楽しむ夏期講習」

本年度の夏期講習の日程が決まりましたのでご案内致します。

日程と内容



第1回 8月6日(日)

齊藤 裕 (建築家・齊藤裕建築研究所 代表取締役)

「利休・有楽・遠州の国宝三茶室」



第2回 8月19日(土)

加藤 亮太郎 (陶芸家 幸兵衛窯八代目)

「美しい美濃桃山陶と私」



第3回 8月20日(日)

前端 春斉 (茶乃湯塗師・公益財団法人無限庵 代表理事)

「棗のできるまで ～鎌倉建長寺開山堂修復～」



第4回 8月26日(土)

降矢 哲男 (京都国立博物館 調査・国際連携室長)

「佐竹本からみえる数寄者の想い」



第5回 8月27日(日)

大西 清右衛門 (千家十職 釜師)

「茶の湯釜 その魅力」

会場 財団茶室「晴松亭」広間

時間 午前の部 10時30分～、午後の部 14時～の2回

定員 各回20名

会費 10,000円(5回セット券) 高校・大学生は5,000円

申込 7月10日(月)午前10時より電話にて受付開始

参加ご希望の方は、事務局までお申込み下さい。

お申込みの際は、午前か午後のどちらかのコースをお選び下さい。

茶華道ガイド

急遽中止等の変更となる場合があります。

表千家同門会香川県支部

TEL (087) 845-4638

7/23 大西・アオイ花茶会 席主:長谷美智代
大西・アオイ記念館 800円 9:00～15:00

茶道裏千家淡交会高松支部

TEL (087) 841-0605

7/23 子ども茶会 席主:高松支部学校茶道連絡協議会
香川県文化会館
500円 10:00～15:00(午前・午後指定)
〈淡交会高松支部月釜〉 前売券のみ・入席時間指定
大西・アオイ記念館 800円 9:30～15:00

6/4 席主:横倉宗翠

7/2 席主:高松青年部

9/3 席主:井上宗恵

茶道石州流琴松会

TEL (087) 888-5311

6/18 高松市茶華道協会文化祭 茶会
槇の間 席主:茶道石州流琴松会
そてつの間 席主:三癸亭賣茶流
玉藻公園披雲閣 2,000円 9:00～15:30

武者小路千家香川官休会

TEL (087) 862-8574

7/2 香川官休会 竹林茶会 席主:長町妙千
志度竹林寺 800円 8:00～14:00
〈香川官休会月釜〉 無量寿院 800円 9:00～15:00
7/9 席主:小池妙公
9/3 席主:長町妙千

高松市香南歴史民俗郷土館

TEL (087) 879-0717

〈由佐城月釜茶会〉 前売券のみ
第2研修室(和室) 600円 9:30～
6/18 席主:島上宗節、中浦宗志(讃岐清水派石州会)
7/16 席主:安田宗輝(裏千家 川原宗津社中)
8/20 席主:豊島宗喜(香南中学校茶道部裏千家)

▶ おいでまい香川

香川県内の様々なイベント情報を随時更新中!

<https://oidemai.kagawa.jp/>



編集後記

八十八夜の頃、茶摘みのイベントが放映され、郊外では農業用水路の清掃や田起こしなど稲作に向けて準備がされています。ここ讃岐には守り続けてきた農事に関する伝統行事が多くあり、これから各地域で行われることでしょう。

当財団も設立三十年を経ました。茶道文化の啓発と地域の伝統文化の発展と継承の奨励の理念の下、財団賞授与や文化事業助成金交付など様々な活動をしてきました。特に貸茶室事業では茶会は勿論、コンサート・生け花パフォーマンス・講演などとお茶席とのコラボレーションでご利用いただきました。

これからも茶道に親しむ青少年のために、また幅広い芸術文化活動の助けとなれば幸いです。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団 編集部

TEL (087) 826-1335

FAX (087) 826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp